
「明日になれば 今日の空の色がわかるから」

綉芭葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「明日になれば 今日の空の色がわかるから」

【Nコード】

N0979P

【作者名】

綉芭葵

【あらすじ】

僕が、君に手紙を書いた。

やっと君に話せる気がするから。

君は、僕の話聞いてくれる？

ブローグ手紙 僕から君へ

君の声が聞こえる。

嘘じゃない。

まだ僕らが幼かった頃の君の声。

君は覚えているだろうか？

君が僕に言った言葉を。

そしてまだ僕が君の言葉を覚えていて、

よくそれを思い出して、一人でその言葉の重みに苦しくなる事を知ったら。

君はまたあの頃のように、笑ってくれるだろうか？

あの頃、僕たちは自分たちが思っていた以上に子供で、今の僕たちが思っている以上に大人だった。

少し、考え方が大人になっただろう？

僕だって、少し、ほんの少しだけ進歩したんだ。

・・・だから。

君に聴いて欲しい話があるんだ。

どこから話せばいい？

始めから聞いてくれる？

よかった。そう言ってくれて。

それじゃあ、話をしよう。

君と僕が、初めて会ったあの日のことから・・・。

始まりの音がした

君は覚えているだろうか？

僕と君が始めて逢ったあの日の事。

君は忘れてしまっているかもしれない。

でも僕ははっきりと覚えてる。

中学3年生が始まって少したった5月の始め。
ゴールデンウィークが始まる少し前だった。

僕はあの日友達の前田と学校の購買に居残っていて、
英語の宿題をやっていたと思う。

「なあ加賀、この英文ってなんて訳すんだよ？」

「……………」

「なあ加賀、加賀！」

「！？」

「……………俺の言った事聞いてた？」

「……………ごめん、何？」

「……………お前ってさ、時々上の空になるよな。」

「……………そう？」

「うん。まるで何も見ていないようにさ。」

「原田はいい奴だ。僕の事よく見てくれてる。」

「あはは……そんな事ないし。なんか考えてるから。」

これは本心。ただし我に返ったときには何を考えてたのかは忘れてるけどね。

「それで？」

「え？・・・ああそうだ。この英文。なんて訳す？」

「Shall we go to shopping?・・・これだと、一緒に買い物に行きませんか？だよ。」

僕は原田が小テストで3点を取ったがために、担任のハブティに出された英語の課題を手伝った。

「一緒に買い物に・・・っと。よっしゃ終わったー!!」

「はぁ・・・やつと終わった・・・。」

「ははっ！悪いね。」

「悪いねじゃないよ。俺ホントなら、自分の宿題をするつもりで来たのに。」

「だから謝ってるだろ?・・・っじゃあ俺、これ提出してくるから。」
そういつて、ニヤリと笑うと原田は購買を出て行った。

「・・・はぁ。」

僕はこの頃、周りの事ばかり気にしていて、友達といてもどこかいつも空虚だった。

「もうこんな時間か。」

時計に目をやってみると、5時を回っていて、いつの間にか購買にいたほかの生徒は帰っていた。

購買にいるのは僕1人。

「・・・静かだなって思った。

何にも音がしない。

「・・・まるでこの世界に僕一人しかいないような・・・。」

トントントン

その時、僕1人の世界に入ってくる音がした。

原田？

違う。原田の音はもつとばたついている。

こんなきれいな音はしない。

じゃあ誰・・・？

そして顔を上げた。

あげた先には君がいた。

君がいたんだ。

始まりの音がした（後書き）

初めてこうゆう風に書いているので、
言葉として間違ってたかもしれない。
でも私なりに加賀くんをこの物語の中で楽しく動かしていきたいと
思っています。

次の話でやっと「君」といわれ続けてきた子が登場しますよ！

5月の出会い

君は覚えているだろうか。

桜が散って、もうすぐゴールデンウィークがやってくるって皆がわきたっていた金曜日の事を。

僕が、初めて君に出逢ったあの日の事を。

僕が顔を上げると、ドアの向こうに一人の少女が見えた。肩より長い、茶色がかった髪の毛を2つにしばって、

学校指定のジャージを着ている。

・・・この子どこかで会ったような・・・。

そう思っているうちに彼女はドアを開けて、こっちを見ると困ったように笑った。

「・・・しまった。もう購買閉まつてる。」

そういうと、「はあ」って一つため息をついて中に入ってくる。

「困ったなあ・・・、持って戻らないと先輩たち怒るし。」

だからと言って勝手に持って行ったら、購買のおばさんに怒られるよね・・・。

わあ・・・、八方ふさがりじゃん・・・。」

・・・すごい。この子一人でこれだけの事を話しきった。

僕は何かおかしい所に感心しながら、その少女を見る。

「ねえ加賀くん。何かいい案無い？」

「・・・・・・・・え？」

・・・・・・・・ちょっと待って、どうして君、僕の名前知ってるの？
そう言おうとする僕の前で、その子は僕をすぐる様に見てる。

「困ってるんだ。先輩に購買から椅子3個ぐらい借りてきてって言

われちゃったの。」

そんなこと言われても……。

「だよね……はぁ……仕方ない……。」

勝手に持つて行こう。怒られたらその時はその時だよね？」

彼女はにつこり笑うと、椅子を3つ重ねて持つていこうとする。

「……いや、つちよつとそれはまずいんじゃないか？」

そう思ったとき、僕に一つのアイデアがうまれた。

「つちよつと待つて。」

「？」

もう出口の手前まで来ていた彼女は驚いた風に振り向いた。

まあ、ここまで「え」しか言ってない男にいきなり呼び止められたら、誰だつて驚くと思うけど。

だけど、止めたんだからちゃんと言わないとね。

「……何も言わないで持つていくのがまずいつて思ってるなら、こうしたら良いんじゃない？」

「加賀くんつて、本当に頭良いんだね。」

僕が彼女に提案したのは、紙に何故椅子を持つていくのかと自分は誰かを書いて

購買に置いていくということだ。

それなら購買の人たちが見たとしても大丈夫だし、

戻した時に購買の人たちが見ていなかったら回収してしまえばいい。

「でもごめんね、ルーズリーフとシャープペンまで借りちゃって……。」

そう、この子手ぶらでここまで来てたから、僕の紙とペンを貸したんだ。

「いいんだよ、困った時はお互い様だから。」

そう僕が言つと、彼女は本当にうれしそうになつこり笑った。

「ありがとう。」

「……なんだろう、よくわからないけど嬉しいかもしれない。」

そうだ、せっかくだからさっきから思っていた疑問も聞いてしまおう。

「ねえ、一つ聞いても良いかな？」

「なに？」

彼女は「演劇部」という文字まで書くと顔を上げた。

「なんで君、僕の名前知ってるの？」

「え、なんでって・・・。」

彼女はあきれたような顔を一瞬すると、また書いていた紙に視線を落とす。

・・・いや、いくらなんでも無視は無いだろう、無視は。

そう思っていると、

「できた！」

そう叫んでその子は僕にその紙を見せる。

・・・今度は僕が絶句した。

そこには

「部活で使うので、購買から椅子を3つお借りします。

演劇部 中等部3年1組 宮坂 祐希」

と書いてある。

「3年1組・・・ってことは・・・。」

なんで、僕がびっくりしてるかって？

そんな事決まってる。僕の在籍しているクラスが・・・。

「そう。」

彼女は・・・訂正。

宮坂は、おかしそくに笑うと、こう言った。

「私、中等部3年1組の宮坂 祐希。・・・君のクラスメート。

これからよろしくね、加賀くん？」

たぶんこのときの僕ほど、バカみたいな顔をしていた奴はいないんじゃないかな。

クラスメートを、
特に君の事を、知らなかったなんて、
今思つと正直どうかしてる。

5月の出会い（後書き）

前回に比べると、個人的には、少しだけ進歩したかな??
という感じです^^

このお話は、手紙↓回想↓手紙
の順で（今の所）進んでいます。

ゆっくりですが、読んでいただけると嬉しいです。

お礼と迷惑

あの後君は、「じゃあね」って、にこりと笑うと椅子を持って、どこかに行ってしまった。

多分、視聴覚室に行っただんだよね。今ならわかる。

それから、何日かした、ゴールデンウィークが終わった木曜日に君は僕の席にやって来たんだ。

「加賀くん。」

2時間目の授業が終わった休み時間、ぼーっと次の授業の準備をしていると宮坂は僕の席へやって来た。

「はいこれ、借りてたルーズリーフ。」

そういうと、宮坂は自分のルーズリーフの袋の中から1枚取り出して僕の前に突き出す。

「貰って？」

「……いやいや、ちょっと待て、「貰って？」じゃないだろう。」

「えー？だって、1枚借りたから、1枚返さないと。」

そう言うのと、「ほら。」って言うて僕に無理やり手に取らせると、

「はい、返した。」

と言うて笑った。

だけど、何か気持ちよくない。

「あのさ。別にいいんだけど、返してくれなくなっちゃって。俺、まだ持つてるしルーズリーフ。」

僕は心の底から思ったことを口に出すと、宮坂にルーズリーフを返そうとする。

「ほら、返すよ。」

「……何その、「俺金持ちです」発言。だから貰ってってば、私困

るもん。」

そう言つて、少し宮坂は膨れた顔で俺を見る。
でも僕はまだ引かない。

「悪いよ、人から貰うの俺好きじゃないんだ。」

「私だつて人から貰いっぱなしじゃあ気持ち悪いんですけど。」

「でも、これ宮坂のだろ、結果的に貰つてるし、別に俺なんて気にしないでもいいから。」

「気にするよ。借りて返さないなんてそんなの泥棒と一緒にじゃん！
そんなの私の美意識に反する！！」

何か客観的に見ると、ものすごく変な会話になつてきたなと思いつつ、僕はどうするべきかを考える。

宮坂は明らかに「引く気はない。」と言つような目つきで僕を見て
いるし……。

「……あー、やつぱり貰つといた方がいいかもしれない。」

「……わかった。貰つとく。」

「……よかった。」

宮坂はさっきまでの厳しい目つきとは180度うって変わつて、
優しいような目つきになつて微笑んだ。

「あはは……、だけどおかしかったあ。今の会話、客観的に見たら、
明らかに変だつたよね。」

僕も思つていたことを同時に思つていたのかとびっくりしつつ、僕
もこう切り返す。

「宮坂がものすごくきつく言うからだよ。」

「なっ……違うよ！加賀くんが素直に人の行為を受け取ってくれな
いから……。」

そついうとまたむすつとした顔になる。

「だって、悪いじゃん。人から貰うのって。」

「貰つてゐるわけじゃないじゃん、貸したものを返してもらつてゐるだ
けでしょ。」

へんなの……ってけらけらと笑つと宮坂は、

「加賀くん、ホントにおもしろい。」
と言って、また笑った。

「……この子って、ホントにころころと表情が変わるんだな・・・。」

また僕が変な所に感心していると、

「それから、はい。手出して？」

「？」

何だろうと思ひながら手を出すと、何か小さいものが乗った気がした。

「開けてみて。」

言われたように手をひらくと、そこには1つのキャンディーが乗っている。

「これは、加賀くんのアイディアにお礼ね。」

「え？」

「だって、おかげで私、先輩に怒られなかったんだよ？・・・ついでに購買のおばちゃんたちにも。」

でも、つと言おうとして、宮坂にさえぎられた。

「これも貰うのが悪いなんていうのはナシ！私のお礼の気持ちなんだから、貰っておいてよ？」

そう言つと宮坂はくるりと方向を変えて、教室から出て行つてしまふ。

「お、おい、宮坂！」

あわてて声を出してみるけど、もう宮坂はそこにはいない。

手のひらの上には1つの小さなミルク味のあめ。

「……どうしろって言つんだよ。」

僕は、目の前にあるあめに戸惑いながら、困つたようにつぶやいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0979p/>

「明日になれば 今日の空の色がわかるから」

2010年12月25日18時30分発行